

# こめたびごよみ



## 「田んぼはもう春に向けて準備を始めています」

● 秋田県雄勝郡 利 周一郎さん ●

通常農法では難しいとされる「農薬・化学肥料不使用」に「不耕起農法」で真正面から取り組む利さん。スズメが群がりタニシが繁殖し、蛍が飛んでくる、そんな元気印の田んぼの秘密を聞きました。

農薬  
化学肥料  
不使用



「今朝は霜がおりて、そこらじゅう真っ白になって……」。11月半ばにはもう雪が降り出しそうだという、県内屈指の豪雪地帯・雄勝郡羽後町。10月に刈入れを終えた利さんの田んぼはいま、一面水が張られて、冬の訪れを待っています。

収穫を終えた田んぼに水を？と不思議に思われるかもしれませんが、この冬季湛水が、利さんの実践する「不耕起農法」の大切なポイント。土を耕さずに通年水を張っておくことで、土の中のさまざまな虫や微生物の活動が活発になり、土が肥沃になるという自然農法です。農薬や化学肥料に頼らない利さんの健康な米づくりは、先ごろ10月に秋田県分析化学センターで行われた、残留農薬に関する80項目一斉検査の「すべて検出せず」の結果が物語っています。

とはいえ、この不耕起農法を始めた頃は試行錯誤の連続で、最初の3～4年は収穫高もほぼ半分に減ってしまったとか。「そりゃあもう死ぬほど苦労しましたよ」と、そんな言葉とは裏腹な明るさでワハハと笑います。それでもあきらめなかったのは「農薬や化学肥料を使わない自然な米づくりをしたい」という強い思いがあったから。

耕さない利さんの田んぼは、通常の田んぼと違って土が固く、田んぼの中を走り回れるほど。そんな野生的な土壌だからこそ、利さんの稲は、通常の3倍の太さを持つ根がしっかり張って元気に育つのです。また、耕さないでいいから手間がかからないかといえば全く逆で、田植えは約1週間かけてすべて1本1本手植え。作付面積あたりの苗の本数を通常の1/3にして、

間隔をたっぷりとり、太陽が稲の根元まで当たるように心を砕きます。6～8月は暑い中、手作業の除草に汗を流して。「あまりにも難儀だけど、田んぼにいればワクワクする」と利さん。スズメが群がりタニシが繁殖し、蛍が飛んでくる、自然の恵みいっぱい田んぼ。そこで育つ大粒のお米のおいしさは、お孫さんの食べっぷりが証明しているようで……。

「昨日もうちに遊びに来て食べてったけど、じいちゃんの米おいしい！学校給食のご飯はおいしくねー！って。アハハ」。



これがお孫さんのおやつもちもちおむすび。

こめたび辞典

## こめたび



### 「こめたび応援団」ってどういう意味？

こめたびでは、私たちの活動に共感して下さるお客さまを、愛情込めて「こめたび応援団」と呼ばせていただいています。単にお米を買うだけでなく、農家さんの暮らしを知り、彼らの思いを知ることで、作り手との距離がぐっと近くなり、農や食の未来を、買い手も一緒になって考えていけたら……との願いからです。効率重視の大量生産でおびやかされる食の安全性。食糧自給率の低下。農村の存続問題。食にまつわる危機感が高まっている今、未来を動かしていく小さな鍵は、私た



40名以上の方にお集り頂いた新米パーティ。

ちひとりひとりの消費行動にかくれているのかもしれない。

去る10月27日、こめたび関西支社で、そんな「こめたび応援団」の皆さんが集う「新米パーティ」が開かれました。お鍋で炊き上げる新米のごはんをはじめ、玄米おむすび、秋田名物のいものこ汁やいぶりがっこ、無農薬の野菜が並んだテーブルは、遠い秋田の空気を運んでくれるよう。新米の甘い香りが漂うなか、それぞれマイ箸・マイ茶碗を手に、自然の味覚をかみしめていました。おいしい、と

思わずこぼれ出る皆さんの笑顔。いただきます、ありがとう、と作り手に伝えたい気持ち。それは一番シンプルで力強い応援のカタチ。こんなふうに応援団の皆さんと触れ合えるチャンスは、こめたびにとって大切な元気の素なのです。